

鳥海修

日本で150年の歴史を持つ明朝体は
どのようにデザインされているのか

明朝体の教室



こんな本
いままで
なかった

史上初！
書体デザインの
第一人者が文字の
作り方を書いた

本文用明朝体の
制作手順から、
各書体の比較検討、
文字の歴史まで、
明朝体のすべてを
わかりやすく
解説します。

鳥海修

Book&Design

ナオ
オリジン

28

originally February 2024

上 = カバー
下 = 本文

鳥海修 しのうみおさむ
書体デザイナー。1955年山形県生まれ。多摩美術大学卒業。79年写真研社。89年字游工房の設立に参加する。ヒラギノシリーズ、こぶらなゴシック、游書体ライブラリーの游明朝体・游ゴシック体など、ベース的な書体を中心に100以上の書体開発に携わる。2002年佐藤敬之輔賞、05年グッドデザイン賞、08年東京TDCタイポグラフィ賞を受賞。12年から「文字塾」を主宰し、現在は「松本文字塾」（長野県松本市）で明朝体の仮名の作り方を指導している。22年には個展「しのおみ 水のような、空気のような活字」（京都山崎ヤカウラ）を開催した。著書に「文字を作る仕事」（晶文社、日本エッセイスト・クラブ賞受賞）、「木をつくる 書体設計、活版印刷、手製本—職人が手で作る岩田健太郎詩集」（河出書房新社、共著）がある。



ISBN978-4-909718-10-5
C3070 ¥3200E
定価：本体 3,200円＋税
Book&Design

明朝体の教室

日本で1500年の歴史を持つ明朝体は、どのようにデザインされているのか

鳥海修

鳥海修

日本で1500年の歴史を持つ明朝体は、どのようにデザインされているのか

明朝体の教室

書体デザイナーに携わっている人はもちろん、これから書体デザイナーをめざそうとする人、書体デザイナーに興味のある人は、ぜひこの本から、書体デザイナーの楽しさと奥深さを感じ取っていただけたらうれしいです。明朝体の世界へようこそ。



Book&Design

Book&Design

カバーイラストレーション = 森英二郎

日本の文化を支える明朝体は、どのようにデザインされているのか
——鳥海修著『明朝体の教室』
小宮山博史

金属活字印刷と活字の製法は明治2年（1869）アメリカ人によって上海から日本に伝わった。日本の今につながる明朝体はこの年が出発点であった。活字を作るためには基になる原寸の種字を彫らなければならない。経験したことのない職人の苦闘の歴史がここから始まる。漢字・ひらがな・カタカナという造形の異なる3字種をどう綺麗にかつ読みやすくするか。職人たちは黙々と彫刻に励んだはずである。苦闘の末獲得した造形のノウハウは、長く自分の身近の弟子だけに伝わるだけで、彫師や書体設計者の共有財産とはならない時間が続いていた。その閉鎖的な環境は今も続いており、多くの彫師や書体設計者が獲得した造形のノウハウは広く共有されることはなかったが、その閉鎖環境を破ったのが鳥海修著『明朝体の教室』である。日本に近代的な活字製法が導入されて155年、初めて個々の文字に対するデザインの要点が明かされた。日本を代表する書体設計者によって、ここに記されたまことに細かい処理が、いかに文章を読みやすくするための要因であるかを読者にわかりやすく伝えている。

書体設計を目指す若者や読者にとって、書体デザインの細部にまで踏み込んだ解説は本邦初の快挙と言える。

書体デザインの基礎知識 1
大きさ、骨格、エレメント、太さ
四つのポイントを概説する

書体デザインに携わり始めたとき、知っておきたい基礎知識があります。漢字の作り方の基礎に、そのことを解説します。

書体 作りは、コンセプトを定めることから始まります。本文用書体なのか見出し用なのか、縦組み用なのか横組み用なのか、どういう人が読むのか、読みやすい書体を目指すのか、個性的な書体に挑戦するのか、それらのことを、まず明確にします。
「本文に縦組みに適した、だれもが読みやすいと感じる書体」を作ることにしましょう、その

とき最初に取り組むのが、デザインのイメージを定める作業です。優しさを感ずる文字、スピード感のある文字、大人っぽい文字……これらから作る文字デザインのイメージを、言葉で膨らませていくのです。「優しさが感じられる文字」をコンセプトにするなら、「笑顔のよう」「母性を感ずる」「青春小説を読むのによく使う」となどの言葉が思い浮かびます。そして、

漢字標準字面B (82%)
遊明朝体M
カタカナ標準字面 (82%)



大きさ、骨格、エレメント、太さ 四つのポイントを概説する

假想ボディ (100%)
漢字標準字面A (93%)
漢字最大字面 (96%)

ひらがな標準字面 (83%)

笑顔のような明るいさは空間を広くして、母性の愛情は重心を下げ気味にして表現しようなど、頭のなかでデザインを組み立てます。書体セットに必要な漢字の文字数は1万4000字を超えますが、1画のものから30画を超えるものまで、デザイン的なイメージを崩さなければなりません。そこで、書体デザイナーの四つのポイントが重要になります。「大きさ」「骨格」「字体と形」「フォント・エレメント」「太さ」です。それらに留意しながら12文字の書体見本（43ページ）を作り、そこから師を培っていくのです。本文用明朝体の「漢字の作り方を解説する第1章は、この「四つのポイント」の話から始まります。ただ、漢字と仮名のデザインは、きれいに分けて論じられるのではなく、比較検討のために仮名に言及することもありそうです。

その1 大きさ

文字を作るにあたり、最初に設定する三つの大き

第1章 漢字の作り方

漢字は1500年以上の歴史がある。その歴史をたどると、漢字の作りかたは時代によって大きく変わってきた。本書は漢字の作りかたを、時代ごとに紹介する。また、漢字の作りかたを、時代ごとに紹介する。

目次
第1章 漢字の作り方
1.1 漢字の歴史
1.2 漢字の作りかた
1.3 漢字のデザイン

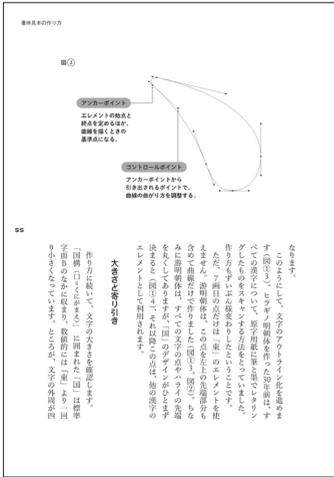
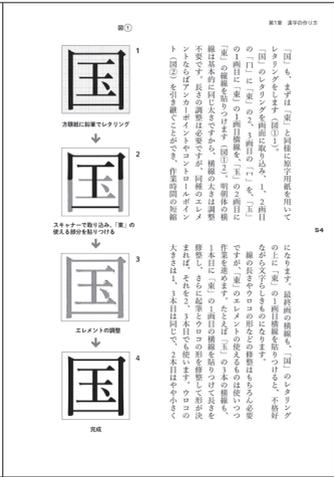
目次
第2章 漢字のデザイン
2.1 漢字のデザイン
2.2 漢字のデザイン
2.3 漢字のデザイン

上右 = 章扉 上左 = 目次
中・下 = 第1章 漢字編

この本は連続講座「明朝体の教室」各回ごとに作成した冊子が元になっています。文章だけではなく図版にも修正を加え、本のために新しく作ったものもたくさんあります。本文1色刷という制約の中で、今回のような複雑な図版が少しでも見やすく、理解しやすくなるよう、最後の最後まで細かい修正をくりかえしました。編集の小沢一郎さんとやりとりしたグラの束は、校了時には段ボール二箱分になっていました。

もちろん、図版作成はすべてが私の手によるものではなく、字工房の岩井悠さんやデザイナーの浅妻健司さんに協力してもらい、小林チエさんと上杉望さんには、全図版の書体チェックをお願いしました。

講座の運営から本の出版までの間、コロナ禍などの大小さまざまな困難がありましたが、みんなでひとつのものを作り上げる楽しさとよろこびを、感じることができました。(赤波江)



コラム「漢字とひらがなの3500年史」

漢字とひらがなの3500年史
1. 漢字の歴史
2. 漢字の作りかた
3. 漢字のデザイン

漢字とひらがなの3500年史
1. 漢字の歴史
2. 漢字の作りかた
3. 漢字のデザイン

漢字とひらがなの3500年史
1. 漢字の歴史
2. 漢字の作りかた
3. 漢字のデザイン

遠い夏の日 小沢一郎

21世紀
表参道の交差点からほど近い小さなギャラリーで、書体史研究者・小宮山博史さんが語る明朝体活字の話に聴き入っていました。日下潤一さんの個展を飾るトイイベントです。梅雨明け直後の暑い日で、汗っかきの私は、ずっとハンカチが手放せませんでした。

小宮山さんの話から、明朝体活字の起源はキリスト教をアジア圏で普及させるためにヨーロッパで作られたことにある、と知りました。美華書館、ウィリアム・ギャンプル、北米長老教会……そんな固有名詞の数々に、好奇心をかきたてられました。と同時に、編集者になって20年、明朝体のお世話にならない日は一日たりともなかったのに、その歴史に無知だったことを反省させられました。

阿佐ヶ谷美術専門学校で開かれた連続セミナー「タイポグラフィの世界」を聴講するようになったのは、あの夜の驚きがあったからです。鳥海修さんの『明朝体の教室 日本で150年の歴史を持つ明朝体はどのようにデザインをされているのか』の編集役をなんとか務めることができたのも、もとをたどればあの夜のおかげです。

ですので、鳥海さんの原稿に「美華書館」の四文字を見つけたときのうれしきは格別で

した。美華書館は北米長老教会の印刷所で、その活字鑄造技術が150年前の日本に伝わったわけですが、『明朝体の教室』にはこのような記述があります。
「心」の正方形化と2画目のL字化を同時に実現した最初の書体が美華書館の明朝体だと気づき、その存在意義を再認識することができました」

日下さんとは、はじめて担当した単行本の装幀をお願いしてからのつきあいです。小宮山さんや鳥海さんとの出会いも、日下さんが取り持ってくれました。

『明朝体の教室』のブックデザインは、原稿をしっかりと読み込む日下流の真骨頂です。静謐なカバーデザインと、カバーから表紙、見返しへと続くグレーの濃度の微妙な変化が、さあこれから勉強するんだという気持ちを高めてくれます。図版については、本全体の統一感だけでなく見開きとしての見え方にも配慮する手法に、なるほど唸らされました。美しい本になりました。遠い夏の日の記憶が、今に繋がる喜びをかみしめています。

おざわいちろう 1955年、東京都生まれ。1980年より講談社で、週刊誌、月刊誌、単行本の編集に携わる。2018年よりフリーランスの編集者。

「サントラ」の時代

関川夏央 昭和残照

一九六〇 年代から七〇年代、レコード業界には「映画音楽」というジャンルがあり、外国映画の主題音楽が「サウンドトラック」（サントラ）として売られた。

作家・姫野カオルコは関西の片田舎での中高生時代、「いまここ以外ならどこでも」という願いを映画に託した、とその著書『顔面放談』にある。だが小遣いを一銭もくれない両親だったから映画館には入れず、立ち読みの映画雑誌の材料で細部までつくった想像力映画を「脳内上映」してよすがとした。

そんな彼女が当時、ぜひ本物を見たいと念願した映画は、『哀しみのトリスターナ』（ルイス・ブニエール監督、カトリーヌ・ドヌーブ主演）とスウェーデン映画『純愛日記』（ロイ・アンダーソン監督、アン・ソフイ・シリーン主演）だった。『純愛日記』は、その一年半後『ベニスに死す』で「世界でいちばん美しい少年」といわれたビョルン・アンドレセン、十五歳のデビュー作だった。ただしチョイ役である。

映画を見られないなら、せめて「サントラ」の七インチ・ドーナツ盤を買いたいと



販売機の下を探り、級友からの寸借を重ねた。そしてその音楽を自分の「脳内映画」に重ねて、文字通り擦り切れるほど聞いた。

どちらの映画も本物を見たのは大学に入った七七年、東京の「名画座」だった。そして彼女は心から驚いた。映画には、耳になじんだ「サントラ」音楽がなかったのである。

ドヌーブの顔のレコードジャケットには、「ヘラルド映画配給・哀しみのトリスターナ・メイン・テーマ」「演奏クロード・デュラン楽団」とあった。レコードに針を落とすと、まず教会の鐘の音が聞こえ、バイオリンの前奏、ついでギターの主旋律、いかにも『哀しみのトリスターナ』の主題曲だったのに、それが本編にはない。

『純愛日記』には、「松竹映画配給・北欧映画・サウンドトラック」「演奏ベルト・アン

デルセン楽団」とあり、低いオーボエの演奏のあとにアルトのスクヤット、スウェーデンの低い空を連想させる音楽だったが、これもない。

実は両方の「サントラ」とも、『翼をください』などの作曲で知られた村井邦彦、二十代半ばの「作品」だった。

著作権侵害に平気だった一九六〇、七〇年代の「サントラ」は、ときに本編の音楽よりすぐれていた。演奏もフィクションの楽団によるもので、『純愛日記』の場合、一時「フリーセックスの本場」とみなされたスウェーデンを避けて「北欧映画」とし、デンマーク的な楽団名をつくった。こうなるとミシェル・ルグランもフランシス・レイも日本人のなり変わりでは、と疑わせもする。雑駁なエネルギーに満ちた不思議な時代だった。

ところで美少年ビョルン・アンドレセンは、『ベニスに死す』公開の一九七一年、日本に呼ばれた。明治製菓のチョコレットのCFに出され、日本人少女の群れをかき分けて軽井沢を歩かされ、コマソンまで歌わされたが、収入はすべて自殺した母にかわって親権を握った強欲な祖母に奪われたという。

ヴィスコンティに捨てられたあと、映画にほとんど出ないまま年を重ねた彼は、二〇二四年には六十八歳になる。その顔の皺は深く、長い髪と髯は真っ白である。美貌とは一過性のはかない「才能」なのだろう。

デビュー

作のピンク映画の題名は最初、『昇天真珠玉』だった。監督の井筒（和幸）さんが付けてくれた。気に入っていた。それが映画の審査で『暴行魔 真珠責め』に変わる。「昇天」と「真珠玉」が並ぶとイケナイらしい。ね、面白いでしょ？ 映倫（現・財団法人映画倫理機構）って。

不案内の方のために慌てて付け加えると、男のイチモツに真珠を埋めると女が泣いて喜ぶと言う俗説（真説？）がある。刑務所では歯ブラシの柄の先をセッセと擦って球状にして埋める。それで「真珠」はエロ映画の題名と親和性が高いですよ、ハイ。

映倫はGHQに言われて49年に出来た、映画界の自主検閲機関。「映画が健全な娯楽として大衆に親しまれ」るようにと、HPにある。全国の大半の、全興連（全国興行生活衛生同業組合）加入の映画館は、映倫マーク（映画のメイタイルの隅に出る）のない映画は上映しないと申し合わせているので、劇場公開したけりゃ審査料（宣材一式1000円、本編2300円/分）を払って映倫に審査をお願いしなければならぬ。

脚本、ラッシュ（粗編集版）、初号（完成版）を審査する。ピンク映画に関わってる頃、銀座の古いビルの一室の映倫へ何度か行った。台詞の女性器の指称（関西版）をカットせよと、審査員の爺さん（大半は大手映画会社

28

N'S COLUMN

西岡琢也

エイリンとブレイク

OBは言う。『仁義なき戦い』で山守親分（金子信雄）が連発していると反論するが、受け入れられぬ。大手との扱いの差に憤った。エロ映画で、映倫との最大の攻防はベッドシーン。一つは男女の腰部の重なり。現場はカメラ前に花瓶などを置いて「花瓶すまこと言う」隠す。挿入も大問題。スクリーンを見ながら、「これ、入ってるよね?」「いえ、まだですよ」「完全に入ってるじゃない?!」「入ってません! まだ入口!」監督は少しでもエロ度を上げたい。片や「健全な娯楽」たらんと口角泡を飛ばす。白昼の銀座の戦いはマンガですよ、はっきり言って。

テレビは各局に審査部があって、映倫以上にうるさい。「未亡人」は削除、日本の車は事故を起こさない、「老人」は「お年寄り」に言い換えよ、携帯の電波が届かない所はなし（三木谷社長、喜んで）……etc。「襲撃されるかも知れませんか」と冗談めいた台詞を書いたら、苦情が来るから削除せよと来た。苦情はどこからと聞いたら、「インディアン」と真顔で答えたのでひっくり返った。

桐野夏生『日没』（岩波現代文庫）を読んで

たら、次々過去の不愉快な検閲体験が甦ってきた。このデイストピア小説の検閲機関は、文化芸倫理向上委員会（ブリン）。役人たちはヘイトスピーチ法に則って有害図書を断罪、当該作家たちを千葉の隔離施設に収容して「更生」させようとする。一見近未来的な設定だが読み進めるうちにこれは現代、現在進行形のドラマ、いやもっと前から創作の世界に浸潤している事態なのだと思えてきて怖くなった。

桐野自身の数々の受難体験のからこの小説が生まれたのだろう。筒井康隆が鋭く反応し強く支持しているのも、同じ受難を何度も経験しているからだろう。

作家たちの矯正に強権をふるう役人や医者たちの悪辣非道ぶりに目がいくが、僕は主人公の難局の相談を軽く受け流し、休みの日には一切電話に出ない若い編集者の存在が気になる。検閲を自覚している者より無自覚に生きていく者の方が恐ろしい。

小説より不気味な現実世界が、確実に進行している。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峽を越えたホームラン』（双葉社/第7回講談社ノンフィクション賞）『坊っちゃん』の時代』（双葉社/谷ロジローと共作・第2回手塚治虫文化賞）、近著に『人間晩年図鑑』シリーズ（岩波書店）。

小劇場

嫌いだ。
の芝居のカーテンコールは

劇場に殺帳がないので、芝居は暗転で終わる。しばらくして場内が明るくなり、役者がゾロゾロ出てきて、並んで頭を下げる。客の拍手。そこでいつも僕は帰る。背中であた拍手。二度も三度もカーテンコールをする。客は帰らない。喜んでいる。阿呆か。

映画でもラストのタイトルローリングになると、すぐ席を立つ。ハリウッド映画なんか延々十分近くある。大半の客は黙って見ている。阿呆か。

たった一度、席から立って見ていた事があつた。あり得ないと馬鹿にしてた、へ観終つても席を立てなかつた」と言う宣伝の常套句通りだった。ポーランドの名匠、アンジェイ・ワイダ『カティンの森』(07)の時だ。

一九四〇年、二万五千人のポーランド軍捕虜がソ連に虐殺された史実に迫るワイダ(製作時八〇歳!)の、激越な気迫に圧倒された。

映画の配信が増えて、世界各国の日本未公開映画が観られる。ワイダの後継者のポーラ

ンドの作家たちの作品にも出会える。『暗殺者たちの流儀』(15)を観た。

アフガニスタンに派遣されたポーランド軍の狙撃手が砂嵐の中、民間人三名を誤射する場面から始まる。最近多い中東の戦争ものかと思いきや、ポーランドの小都市で暮らす、仮出所したばかりの中老の男の日常になる。

一見料理好きでおとなしうに見えるが、射撃名手の殺し屋。大金の絡む事件に関わり仲間の裏切りで十五年の刑を喰らい入獄したが、ちやっかり大金を着服している。突然彼の担当検事から暗殺の依頼がある。警察庁長官を殺せと言う。

ウクライナの政治腐敗は有名だが、各国の権力の裏面は報道されにくい。映画はその一端を垣間見せてくれる。中老は検事に脅かされ、渋々引き受ける。

一時リユック・ベツソンが『ニキータ』(90)『レオン』(94)と殺し屋ものを連発したが、六〇歳近い殺し屋は珍しい。

出所後初めて大金を隠匿したアジトを訪れ、口止め料を請求した大家の老女の額に一発で

射殺、あげく家ごと燃やしてしまう場面は度肝を抜く。しかし深い森で徐々に射撃練習をするが、的が遠いと当たらない。眼科で視力の衰えを指摘される。ニュースで、アフガンの誤射を記事にされ軍を追われた狙撃手の存在を知り、代役にしようと接近する。

ね、中々よく出来たプロットでしょ？ 中老は誤射の記事を書いた記者を射殺して、洗車場で働く狙撃手に近付く。ま、この殺しは手土産代わりなんでしょうね。

狙撃手は仕事内容を明かされると大義のない殺しは嫌だと拒絶するも、結句引き受ける。標的の長官は愛人のオペラ歌手とビル最上階の密会場所に来るので、向かいのビルの一室(検事が手配した。凶器の銃も押取品)から狙撃することに。その部屋は中東の会社が借りているから、モサドの仕業に見せかける魂胆だ。

いよいよ決行される。狙撃手は見事長官を撃ち抜くが、検事が報酬を出し渋る。決行前、「娼婦と殺し屋は前払いだ」と中老は名文句を吐いて全額先払いを要求するが拒否された。案の定その危惧が的中して：この後はかつて『黄金』(48)『地下室のメロデー』(63)等で描かれた虚しい終局が待っている。

配信はいいがこれらの無名の映画の情報は、いくら検索しても出てこない。本作スタッフの次作を観たいが、偶然に任せるしかない。それが残念と言えれば残念。

日日読書
大西良貴

25

『世界音痴』や『現実入門』など既刊本のタイトルが表すように、自意識過剰ゆえの現実との齟齬、自分のダメっぷりを書くのが得意な歌人の新刊。新聞連載のエッセイで各回二ページと短めだけど、やっぱり面白い。日常に潜む違和感、おかしみを絶妙な筆致ですくい取る。店と自宅が微妙に混ざっているタイプの、ルールのよくわからない飲食店の恐さについて書いた「旅先の不安な店」、歯医者に対する、治療の恐さとは別のプレッシャーについて綴る「永遠に工事中」等々。

先日、ご近所の常連男性に「どういの読んでの？」と訊かれ、穂村弘の名をあげたら、後日、この方のお持込みのなかに穂村さんの著作が。「読んでみただけ、何が面白いのかわからなかった」と。穂村さんが書くようなダメ話ってホントは皆好きだろう、となんとなく思い込んでいたけど、そうではないと思知らされた。自分も世の中や常識との距離感をはかりかねることの多い人間だから面白いので、そんなことはハナからまったく気にしていない人もいるのだ、と。世の中には二種類の人間がいるのだろう、トホホ感覚のある人と、ない人。

ビビりは生きにくい、でもそれはものごとをよく味わうことでもある、穂村さんのエッセイを読むとそう思えてくる。近年の著作はこの人なりの成熟も感じられる(って、年上なだけけど)。

澁澤はハタチ前後のボクにとってスター的な存在で熱中したけど、今になって思うと、この人の書くものって、自分の資質とあまり合っていない気も。氏は文学や古典に対してイメージ愛好の側面強く、絵画についての著作もある視覚型の人だが、ボクは文芸に対してイメージ優先ではないし、美術オンチ。若い頃は、自分の生来の好み、自然性に逆らう傾向が顕著で(よく言えば向上心、ありていに言うと背伸び)、自分の今・こころは隔絶した世界を大盤振る舞いしてくれる澁澤の著作に惹かれたのだと思う。内容は高踏的でも、文章自体はととても明快で、読書慣れしていない人間にも読みやすいことも大きかった。

『思考の紋章学』はそれまで西洋派だった澁澤が、日本の古典にも目を向けた著作で、よく読み返した一冊。自在な引用と言及で、東西に通底するイメージや心的パターンを展開。例えば、カフカ「家長の心配」の奇妙な動物オドラデクの純然たる無意味さを称揚し、日本文学で匹敵するものとして、谷崎潤一郎『乱菊物語』の海鹿と馬の合いの子、海鹿馬をあげる、という具合。

澁澤熱も少し落ちてきた二十代後半になって、ネット上で読書サイトを開いたけど、そこでやりとりした人達には、やはり十代の頃澁澤の著作に熱中したという人が多かったものだ。

おおいよしたか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

London Books
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22



穂村弘『蛸足ノート』
中央公論新社／2023年



澁澤龍彦『思考の紋章学』
河出文庫／1985年

にしおか・たくや 1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO <刺青>あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ～遥かなる帰還』、TVドラマ「京都迷宮案内」シリーズ、「返還交渉人」など。

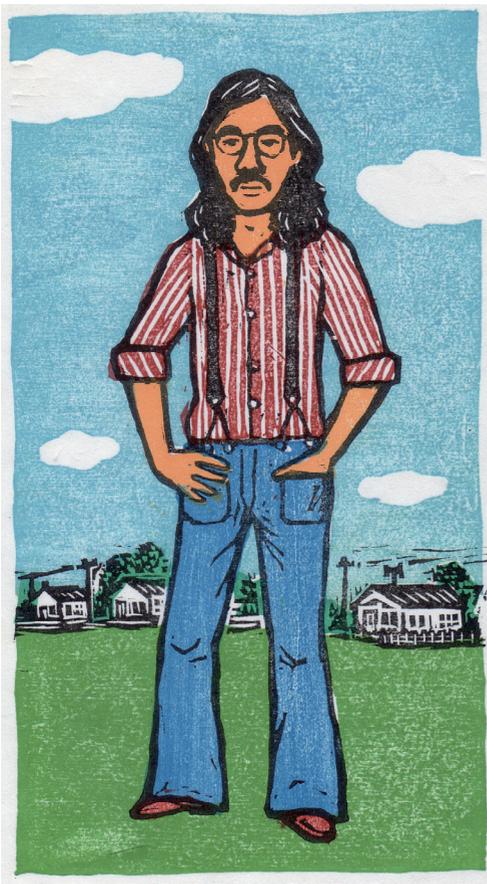
今号は、伊野孝行さん、高山れおなさん、魚住寧子さん、日下潤一は休載です。西岡琢也さんの連載を2回分掲載します。

森英二郎 思い出のクリフォード ⑫

小坂忠を始めて見たのはたしか1972年ごろ大阪の難波の高島屋7階ホールで毎月やっていた「六番町コンサート」だったと思います。このコンサートは、はちみつばい、あがた森魚、シュガーベイブなど当時の大阪ではあまり見ることができなかった東京のミュージシャンがたくさん出ていました。それでなんと、入場料はたった100円。その頃、小坂忠は「小坂忠とフォージョーハーフ（四畳半のこと）」というお洒落なバンドをやっていた。長髪にラップズボンでサスペンダーをしていて、わっ、ジェームス・テイラーみたいやん、カッコええ！ やっぱり東京はちゃうな、と思いました。

次に彼を見たのは埼玉県狭山のアメリカ村と呼ばれていた米軍ハウスの広い芝生の庭でのんびり椅子に座っていた。一緒にいた友人が、小坂忠さんやで、と教えてくれた。

もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本『おとうさんのうまれたうみへのまちへ』など。



小坂忠 Kosaka Chu 1948-2022



E.Mori

2月上旬、息子と一緒にハンバートハンバートのライブへ。東京国際フォーラム。彼らのライブは未就学児入場可。赤ちゃんを抱っこしている人も、家族連れも多い。ふたりで、一曲終わるごとに両手を頭の上に高くあげて、拍手をした。大きなホールで音楽をきくのは久しぶりでたのしかった。一番盛り上がった曲は『国語』。〈外国のコトバをカタカナに／わからないことを曖昧に〉〈ねえ、コンプライアンスって？／ねえ、キックバックって？／騙すときにだけ使うなよ／テメーの都合で使うなよ〉（赤波江）

連載の西岡琢也さんのおすすめの映画『レディ・マエストロ アントニア・プリコ』（オランダ／2019／マリア・ベテルス監督）をアマゾンプライムで。女性指揮者の草わけの実話。1920年台にNYのオランダ人移民の少女が独学で音楽を。男だけの場所に女が入る。その困難は想像を絶する。素晴らしい作品。この映画を観て、デザイナー石岡瑛子について彼女と同時代の男性デザイナーたちから聞いた話を思い出す。エキセントリックな彼女への冷笑と嘲笑。彼女も一人で闘っていたのだろう。今月は私も休載、『明朝体の教室』に頁をゆずる。（日下）

今月の
あとがき

Originality February 2024
ナオ
リ
リ
ジ
28

2024年2月15日発行 〈ロゴデザイン〉ヨコカク 〈編集・デザイン〉赤波江春奈・日下潤一 〈印刷・製本〉グラフィックス
〈発行〉ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2024, Printed in Japan 【無断転載禁止】

◆Web = bgraphix.com ◆Twitter & Instagram = @bgx_book_design ◆日下潤一のプログ = www.bgx.jp/blog/
「オリジナリ」はBGXが毎月発行するフリーペーパーです／90部／お問い合わせは akabae@bgx.jp まで

1992年に『芸術新潮』のカメラマン見習いになって、まず教わったのは複写。左右から2灯の「アイランプ」写真電球で、平面に均等に光が当たるよう調節する。

たくさん付箋のついた画集やカタログが夜のスタジオに積み上げられ、複写台に覆い被さる体勢でカメラを覗き、端から淡々と複写していく。

雑誌ってこんなにも他の本から持ってきた図版によって成立しているのかと驚いた。

立体物を撮る際には話が変わる。写真は1993年1月、銀座の画廊で舟越桂展を撮影中の松藤 庄平カメラマンと助手の私。

長く伸ばしたライトスタンドの先、天井近くから500Wのアイランプが強い光と熱を發して、彫刻作品にハイライトと影を作り、立体的に浮かび上がらせているはず。

「太陽は一つなんだ」と松藤さんと言う。私のもう一人の師匠である野中昭夫さんが、最新の照明器具で障子越しのようなやわらかな光をたくみに使いこなすのと対照的な、無骨で力強いライティングだった。

松藤さん、野中さん、そして当時の編集長、山川みどりさん。

何もわからなくせに、じつは内心生意気だった私をよく我慢して教えてくださったものだなあと、旅立たれた方々に、今深く感謝している。



いま写真部ロッカーの奥に詰め込まれ見向きもされなくなったアイランプ



つづくち・なおひろ
1971年、東京都練馬区生まれ。新潮社写真部に勤務。現在も『芸術新潮』のカメラマン。私が日々持ち歩いていたMinolta CLEでこの写真を撮ったのは当時の編集者浅利星司さん。

お

正月は息子とふたり、長崎の実家へ。大晦日の夕方、羽田空港から飛行機に乗った。

長崎ゆきのゲートは、いつも空港の一番はしっこ。69番。保安検査場から、めちゃくちゃ歩く。動く歩道を歩きながら息子になんども「ねえ、ぼくたちの乗るところ、まだ？」と聞かれる。「うん、まだ、まだ、ぜんっぜん、まだまだ！」

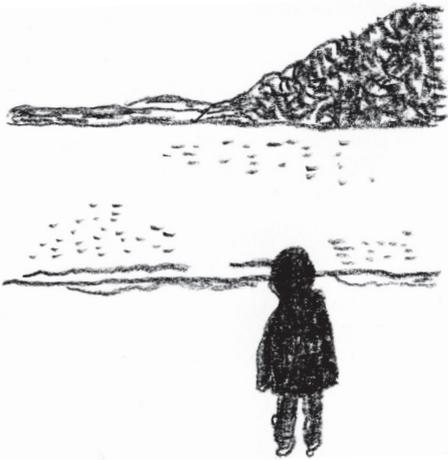
息子が初めて飛行機に乗ったのは、その後2ヶ月のとき。里帰り出産を終え、長崎から東京の家に戻るときだった。

母親になったばかりのわたしは、ガチガチに緊張していた。泣いたらどうしよう、泣きやまなかったらどうしよう……と1時間半のフライト中、ずっと息子の顔を見つめ続けていた。

この飛行機が墜ちたらどうしよう、なんてこれっぽっちも考えなかった。息子がこの閉ざされた空間で泣き叫ぶんじゃないか、泣きやまないんじゃないか、ただただ怯えた。結局そのとき息子は一度も起きず、かわいい顔でぐっすり眠っていた。

飛行機に乗るたびに、あの時の苦しいほどの緊張と、息子の寝顔を思い出す。もう公共の場で、泣きわめいたりすることはない。それでも毎回思い出して、少しか緊張する。

息子は自分の席につくと、リュックを



お正月は
海をみにいった
長崎 豊子 平

4 離陸のとき

My Kid's Diary

赤波江春奈

座席の下にしまいい、シートベルトをしめ、モニターをサクサク操作。

「ねえ、お母さん『マイ・エレメント』あるよ、見てもいい?」「お、良いね、見なよ!」

わたしは答えながら、バッグから文庫本をとり出して開く。子どもって、こんなにあっという間に育っちゃうのか。

離陸のときだけ、息子の手をにぎる。ちからを入れると、息子もにぎりかえしてくる。

1月1日の地震のとき、1月2日の飛行機事故のとき、最初に思ったのは、小さな子どもを連れた母親たちのこと。

過疎化が進む地方で被災すること、お正月という特別な日に事故に遭うこと。自分だったら、家族を守るために何が

できるだろうと考える。物理的な準備も、心の準備も、してもしても、足りない気がしてならない。何もできず、硬直する自分しか想像できない。

大晦日の羽田空港。長崎空港ゆきのゲートの隣は、能登空港ゆきだった。

ああ、長崎も能登も、日本のはしっこだよなあ、と思いながら、能登へ帰るひとたちを眺めた。

1月5日の夜、羽田空港への到着は、予定より30分だけ遅延した。暗い滑走路に目を凝らしたが、そこにはなにも見えなかった。

あかばえ・はるな 1985年、長崎県生まれ。愛知県立芸術大学卒業。2010年にビーグラフィックス入社。2017年9月出産。帰省のあと、息子に「お母さんの生まれた町って田舎だよね」と言われた。